

村上春樹論

——『1Q84』における〈コミットメント〉の到達点と〈継承〉の可能性——

山本 智美*

要 旨

『1Q84』における〈コミットメント〉を分析することで、村上春樹文学の転換を論じる。一九九五年一月の阪神淡路大震災と三月の地下鉄サリン事件を機に、村上文学は〈デタッチメント〉から〈コミットメント〉へと転換した。〈デタッチメント〉の時期に書かれた作品には、恋人や妻を傷つけ、孤独に陥る主人公がしばしば表れてきた。〈デタッチメント〉からの転換として〈コミットメント〉があるにもかかわらず、安易に社会参画の意として捉え、それが表れていないと批判する先行研究が多く見られる。『1Q84』もまた、スピーチ・「壁と卵」と比較され、社会参画を前提に読まれている。果たして〈コミットメント〉が社会との関わりを対象にしているのだろうか。『1Q84』における〈コミットメント〉が対象とする関わりを分析することで、社会参画を前提とする読みを批判する。

〈コミットメント〉は青豆と天吾の共時的な一対一の異性愛のつながりを対象とする。それ以外の関係性は、異性愛への布石として機能する。換言すると、〈コミットメント〉は一対一の異性愛以外の関係性を度外視している。社会との関わり合い、その第一歩となる母なるもの、父なるものとの通時的な関係性もまた度外視されているのだ。それは、青豆と天吾

が結ばれるために、全ての関係性を断ち切り、1Q84の世界から逃げていく姿に表れている。通時的なつながりを保持するものが〈継承〉である。天吾は父親の遺した謎を解くことで、彼の個人史を〈継承〉する可能性が表れている。可能性は可能性のまま、〈コミットメント〉の背後に隠れてしまうが、〈コミットメント〉の到達点と〈継承〉の可能性が同時に描かれた点に、村上文学の再転換、すなわち〈コミットメント〉から〈継承〉への萌芽を読み取ることができる。

目 次

- 序 論
- 一 〈コミットメント〉が対象とする関係性
 - 1 母子的な癒着から異性愛へ——青豆と他者とのつながり
 - 2 後景化する導くものとの関係性——天吾と他者とのつながり
- 二 象徴的な父殺し
 - 1 青豆とリーダーの関係性
 - 2 天吾と父親の関係性
- 三 〈コミットメント〉の到達点と〈継承〉へのまなざし
- 結 論

序論

『1Q84』は新潮社より刊行された、村上春樹の書下ろし長編小説である。BOOK1、2共に二〇〇九年五月に、BOOK3は二〇一〇年四月に刊行された。

本作はジェンダー⁽¹⁾、宗教、システム⁽²⁾といった、村上春樹文学を語る上で欠かせない要素を多分に含んだものであり、多角的に論じられている。その中でも、〈コミットメント〉をめぐる分析は、『1Q84』においてもなされている。石原千秋は以下のように評価している。『1Q84』は内容的には社会へのコミットメントを示した『アンダーグラウンド』の血をひきながら、形式的には村上春樹お得意の交互に主人公が入れ替わる書き方を使って書かれており、以前の村上春樹の読者も、自分にとっては多すぎる読者も、同時に引き受ける覚悟を決めた小説ではないだろうか⁽⁴⁾。一方、池田純一は〈コミットメント〉の転換を村上春樹がプリンストン大学で客員研究員として勤めていた時期に見出し、以下のように論じる。

村上が『ねじまき鳥』を書いたのは、こうした宗教性の名残を色濃く残した場所だった。アメリカの大学は、その地域の文化や社会活動の拠点でもある。つまり、何かの価値を信じて行う活動の集積地だ。そうした様々な社会活動の実践の場で、コミットメント、つまり、社会的責任や互助の精神のようなアメリカ的価値が追求される。同時に、そのような価値に基づく行動を動機づける様々な物語が語られる。(略)

「データットメントからコミットメントへ」という村上の展開はこうした現実を目撃したところから生まれたのだらう⁽⁵⁾。

その後、『1Q84』では「コミットメント＝相互扶助の精神とい

うような、プリンストン時代や『カフカ』で見られたような素朴な理解では追いつかなくなっている」と池田は続け、批判的な立場をとっている。

石原も池田も、評価するにせよ、批判するにせよ、社会参画を前提に〈コミットメント〉という語を用いている。その中でも『1Q84』には二〇〇九年二月、エルサレム賞受賞時のスピーチ「壁と卵⁽⁷⁾」での主張が作品に反映されていないという文脈での批判が目立つ。これもまた〈コミットメント〉が社会参画を意味するものとして自明視されていることを意味する。島田裕巳は以下のように論じている。「文学者として、政治的な強者の側ではなく、あくまでも弱者の側に立つという、政治的な姿勢の表明になっっているわけですが、それは彼が小説のなかで書いていることを裏切っているようにも思えます」。「本当に壊れやすい卵の側というものがあるのか、小説のなかではそれを問うているのに、現実の政治的な発言は、それとは分裂してしまっている」⁽⁸⁾。竹内真は以下のように論じる。「本来政治的・社会的でないことを矜持としてきた人間が、政治的・社会的な存在に脱皮しようとする不格好さを、村上春樹はここに来て臆面もなく人前に曝し始めたように見える」。「その不格好さが最も無惨な形で表出したのが、例のエルサレム賞受賞スピーチだったのだらう。その姿は、『1Q84』を読んだ今となっては、どこか哀愁に満ちた、一種の親近感さえ感じさせるものに僕には思える」⁽⁹⁾。これらはスピーチにおける主張と物語のテーマを安直に結びつけた結果と言える。生身の作者の言葉と作品を直結させることは物語分析を浅薄なものにする。宇佐美毅は村上春樹の発言の虚構性に着目し、以下のように論じている。

初期の村上春樹は小説の仕掛けとしての「嘘」を巧みに操り、時には誰もがあつけにとられるような「嘘」を投げかけて、そ

こから多くの「謎」を作中にちりばめる作家であった。しかし、次第に小説ではなくインタビュアーや講演の中で「嘘」をついてしまうようになっていく。そして近年になり、世界的に評価され、全世界に向けて講演などの形で直接発信できるようになっていくと、そこでは自ら「嘘」を否定する言説を述べるようになっていく⁽¹⁰⁾。

この論説を、作者の発言と物語のテーマを安易に直結させることの危険性の提示として読むこともできよう。以下の坂上秋成の論は、〈コミットメント〉に社会参画の意味が含まれていると自明視する言説を批判している点で注目すべきである。

村上春樹の関心が、あくまでも人間に向けられているということには注意しなければならない。彼の「コミットメント」という言葉を、単純に政治や社会に対して真正面から向き合うものとして捉える言説が多いが、それは決定的な誤りである、村上春樹にとつての「コミットメント」とは「語り直しによる倫理」と言い換えてもよい。それは「圧倒的な暴力」によって誕生してしまった汚れた物語を、別の物語を投入することで「浄化する試みである⁽¹¹⁾」。

先に引用した島田、竹内の論考の初出は二〇〇九年七月に刊行された『村上春樹「IQ84」をどう読むか』である。坂上の論考はその約一年半後の二〇一〇年二月に刊行された『ユリイカ』に発表された。坂上が島田、竹内のように「壁と卵」と『IQ84』を安直に関連させた論考を踏まえて批判していることは想像にかたくない。

本論では、物語分析を通して、『IQ84』における〈コミットメ

ント〉が何を対象にしているかを論じる。結論から言えば、〈コミットメント〉は青豆と天吾の一对一の共時的な異性愛を対象としている。そこからこぼれ落ちてしまう象徴的な母子、父子間の通時的な関わりは、〈継承〉という新たな概念によって浮かび上がる。

〈継承〉については、拙稿「村上春樹論——〈継承〉について」⁽¹²⁾でその成立を論じている。〈継承〉とは、人間は暴力という負の遺産をも引き継いだ存在であるという村上春樹の認識が土台となっている。暴力の引き継ぎという限定されたものから、引き継ぐことそのものへ、村上春樹の関心は移行した。〈継承〉といかに向き合うかという問いに『海辺のカフカ』⁽¹³⁾で答えている。それは、〈継承〉した意志をそのまま反復するのではなく、主体的に生きるために自らの意志で物事を選択するという答えであった。この答えは、人とは〈継承〉したものによって形成され、〈継承〉を度外視することはできないという認識に支えられている。天吾の父親が、天吾に〈謎解き〉を求めることで〈継承〉の可能性が表れる。『IQ84』は、〈コミットメント〉の到達点と、〈継承〉へのまなざしが表れており、そこに村上文学の再転換を読み取ることができる⁽¹⁴⁾。

一 〈コミットメント〉が対象とする関係性

1 母子的な癒着から異性愛へ——青豆と他者とのつながり
本章では、『IQ84』における〈コミットメント〉がいかなるものかを論じる。先に、『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』⁽¹⁴⁾において、村上春樹が〈コミットメント〉をどのようなものと考えていたのかを確認する。

村上 コミットメントというのは何かというと、人と人との関わり合いだと思うのだけれど、これまでにあるような、「あなた」の言っていることはわかるわかる、じゃ、手をつなごう」とい

うのではなく、「井戸」を掘って掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる、というコミットメントのありように、ほくは非常に惹かれたのだと思うので⁽¹⁵⁾。

村上 主人公はいろいろな登場人物にコミットメントを迫られるのです。たとえば女の子、笠原メイさん、彼女にもコミットメントを迫られるし、それから……。

河合 加納クレタね、「クレタ島へ行く」と言うでしょう。

村上 そうですね、それともうひとつ、間宮中尉、彼は自分の人生というものを託していこうとするんです。いろいろなかたちで、彼はコミットメントを迫られる。ただ奥さんのクミコさんだけが逃げていく。去っていく。でも、彼がほんとうにコミットしたいのは彼女なのです。

河合 あるいは、言いようにすると、それまでコミットして来た人たちは、クミコさんにコミットするための通路のようなものだったのでしょうか。

村上 物語のはじめでは、彼にはまだクミコにコミットする資格がないんですよ。井戸をくぐって行くことは、その資格を得るための、『魔笛』で言う試練みたいなものじゃないかとほくは思ったんです。それは書き終えてから思ったこと⁽¹⁶⁾です。

村上春樹は〈コミットメント〉を以下のように考えていたと言える。『ねじまき鳥クロニクル⁽¹⁷⁾』の主人公・トオルが最も〈コミットメント〉したい存在は妻・クミコであるが、他の登場人物との〈コミットメント〉もまた必要である。クミコとの〈コミットメント〉は「試練」（＝「井戸」掘り）を潜り抜けてもたらされる。「それまでコミットして来た人たちは、クミコさんにコミットするための通路の

ようなものだったのでしょうか」という河合隼雄の問いに村上春樹は何も答えていないが、これは肯定として受け取ることができよう。何故なら、『ねじまき鳥クロニクル』は、他の登場人物たちとの〈コミットメント〉なしにトオルが井戸に入ることはできないため、それは望むものを獲得するための「試練」となり得る。

この時期に想定されていた〈コミットメント〉は、『1Q84』でどのように反映されているのか。まず、主人公である青豆、天吾と他の登場人物とのつながりを分析する。青豆、天吾ともに何人かの個性的な登場人物たちと交流するが、最終的に二人は互いを必要とし、1Q84の世界から脱出する。換言すると、この世界で交流した人々との関係を断ち切り、彼らは結ばれるのである。二人のつながりのための布石、またはそれにとって代わるものとして、その他の登場人物との関わりが描かれている。

青豆と他者の交流は、主に環、あゆみ、老婦人、タマル、さきがけのリーダー、天吾によるものである。リーダーとの関係は次章で論じる。青豆にとって老婦人は象徴的な母である。青豆は主体的に物事を判断する能力のある人物として描かれている。彼女が担当する護身術クラスでの拳蹴りの練習は、「もし男が力づくで迫ってきたときに、その拳蹴りを効果的に蹴り上げることができなかつたら、ほかになすべきことはほとんどないのだ。かかってきた相手の腕を逆にとつて、それを背中やねじり上げるといふような高等な技が、実戦できれいに決まるわけがない」という信念に支えられている。これをやめるよう苦情が出た際には、青豆は上司に意見を表明している。このような青豆の主体性は、老婦人の前で発揮されることはない。青豆は、リーダー殺害計画のように自らの命が危険にさらされる場合でも、特に意見することはない。この従順さは、母を慕い、言いつけを守る子どもと類似している。日曜日のたびに、母親に連れられて布教活動を行った幼少期の青豆は、言いつけを守

る従順な子どもであった。彼女は棄教を宣言することで、家族から無視されるといふ仕打ちを受ける。布教活動という不本意な目的ではあるが、長い時間を共に過ごした母親からの無視は、青豆をより深く孤独に陥らせるものであったことは想像にかたくない。母親にとって、棄教した青豆は「信仰を捨てたもの」に過ぎず、「娘ではなくなった」と語られている。彼女が老婦人の期待に応え続けることは、再び母から見捨てられないために行われていると考えられる。老婦人は青豆に「あなたが私の本当の娘であればよかったのに」と発言していることから、二人の結びつきが母子的なものであると言える。

青豆と老婦人のつながりは、共感と秘密の共有によって成り立ち、強化されている。青豆の友人・環と老婦人の娘は、どちらも夫による暴力に苦しみ、自死を選択した。青豆は環の夫を殺害することで、老婦人は娘の夫を「世間的に破滅させる」ことで復讐を果たす。この秘密を分かち合うことで二人は結びついている。換言すると、環とのつながりは、青豆と老婦人を結びつける装置として機能している。あゆみとのつながりにも同じことが言える。あゆみの死を知った青豆は、彼女を死に至らしめた物事に思いを巡らす。「まわりの男たちが力づくで押しつけてくるねじくれた性的欲望が、その大きな要因のひとつになっていたことは間違いない」。「もちろん犯人には捕まっただけじゃなかった」。しかし犯人が逮捕されて裁判にかけられ、その殺人のディテールが明らかにされたとして、それでどうなるのだろうか。何をしたらとところで、あゆみは生きかえりはない。「判決だっただけでどうせ軽いものになるはずだ。おそらく殺人ではなく、過失致死事件として処理されることだろう」。以上の引用から、青豆はあゆみを損なった男性たちに怒りを募らせ、老婦人と連携して行く復讐の必要性を実感していると言える。また、秘密の共有によるつながりの強化は、青豆とタマルとの交流によってもたらされている。

る。タマルは、自身の出自や「大事な風景」である「ネズミを木の塊の中から『取り出している』」友人について青豆に語る。彼女はタマルの語りを「私は今では彼らの属しているファミリーの不可欠な一員であり、いったん結ばれたその絆が断ち切られることはない」というメッセージとして受け入れている。「ファミリーの一員だと思えばこそ、彼は自らの秘密を少しづつ彼女に伝えているのだ」とあることから、タマルとの交流が、疑似的な家族、青豆と老婦人による象徴的な母と子のつながりを強化していると言えよう。

彼女たちのつながりは、青豆と天吾のつながりにとって代わる。リーダー殺害を目前に、青豆はタマルに拳銃の調達を依頼する。それは、さきがけに捕まった場合に「拷問されたりするのは困る。誰の名前も出したくない」が故のことである。彼女は自らの命に代えて老婦人を守ろうとしている。しかし、天吾との再会を望むことで、青豆は自死の決行を中断し、老婦人との間で交わされていた約束を破る。青豆は老婦人と「別の人間になる」ことを約束していた。具体的には顔の整形手術を行い、仕事を辞め、名前を変え、遠い所へ移動するというものである。これらの約束を実行に移すと、青豆が青豆として天吾に再会できなくなってしまう。それ故に、彼女は老婦人との約束を破らざるを得なかったのである。すなわち、母子的なつながりは、天吾との一対一の異性愛を前に後景化しているのである。以下の会話は、この変化を最もよく表している。

「私の中にあつた激しい怒りもなぜか、あのおびただしい落雷のさなかに失われてしまったようです。少なくとも遙か遠くに後退しました。」(略)

青豆は言う、「ちょうど同じことが私の身にも起こったのです。あのたくさんの雷が落ちた夜に」(略)

「それは今では力を失い、あなたは妊娠している。そのかわりに

と言うべきなのかしら」

青豆は呼吸を整える。「そうですね。そのかわりに私の中には小さなものがあります。それは怒りとは関わりを持たないものです」。

老婦人、青豆の「激しい怒り」による結びつきの「かわりに」、天吾との結びつきを象徴する妊娠がもたらされたのである。それ以降、天吾と共に生きる覚悟が明確なものになる。青豆には自身が宿している「小さなもの」を守る「必要があるなら、ポニーテールと坊主頭に迷うことなくありつただけの九ミリ弾を撃ち込む」覚悟ができていく。自死のために入手した拳銃は、天吾と再会し、共に生きるための道具になるのだ。

2 後景化する導くものとの関係性——天吾と他者とのつながり
天吾と交流のある人物は、主に小松、ふかえり、ガールフレンドの安田恭子、看護師の安達クミ、父親、青豆である。父親との関わりについては次章で論じる。小松、ふかえり、安達は、青豆との再会へ導くものとして機能している。雷の晩にふかえりが天吾に「オハライ」をすることで、彼は青豆から手を握られた記憶を鮮明に思い出す。その記憶は以下のように語られている。

きつといつか、もつとあとになって、自分はこの出来事の意味や目的を理解できるようになるだろ、と天吾は思った。そのためにはこの瞬間をできるだけ正確に、明瞭に意識にとどめておく必要がある。今の彼はただ数字が得意なだけの、十歳の少年に過ぎない。(略)そして少女も、今ここで理解されることを期待してはいない。彼女が求めているのは、自分の感情を天吾にしっかりと送り届けるという、ただそれだけのことだ。それは小さな固い箱に詰められ、清潔な包装紙にくるまれ、細い紐でき

つく結ばれている。そのようなパッケージを彼女は天吾に手渡していた。

天吾はこの記憶を思い出すことで、「どうしてたった今まで思い当たらなかったのだろうか？ 彼女はその大事なパッケージを差し出してくれたのだ。どうしておれはそれを開けることなく、そのまま放り出しておいたのだろうか？」「青豆に会わなくてはならない」と決意する。ふかえりは天吾の記憶を喚起することで、彼を青豆の元へと導いている。安達もまた、ふかえりと同じく天吾に青豆の記憶を喚起させる。安達から「ハシッシ」を勧められた天吾は、青豆の幻影を見る。そこで青豆に「まだ時間のあるうちに」「私を見つけて」と告げられ、天吾は駆り立てられる。療養所を去り、東京に戻った天吾は「もし彼女を見つけれなかったら、おれの人生にいったいどれだけの値打ちがあるだろう」と青豆と再会することに自身の人生を賭けさえしている。村上文学には、しばしば主人公を導く存在が登場する。村上春樹は以下のように発言している。

昔、僕の小説に出てくる女の人は、特殊な例は別にして、失われていくものか、あるいは巫女的な導くものか、どちらかというケースが多かった。『1Q84』でも、ふかえりや安達クミは「導くもの」的な役目が強く、年上のガールフレンドは消えていくものですね。その描き方は、前よりも少し重層的になっているとは思いますが、そういうキャラクターはいまでもある程度出てきて、小説的にいえば同じように機能しています。

この発言からも、ふかえりと安達が主人公を導く「巫女」の系譜にあると言える。一方で、小松は現実世界で天吾を導く存在である。小松の存在なしに、天吾がふかえりと出会うことも、『空気が

ぎ』の書き直しを行うこともない。

天吾の物語は、母親の記憶がフラッシュ・バックし、「発作」が起こる場面から始まる。その記憶には「お前はここにあり、お前はここよりほかには行けないのだ」という天吾を束縛する強いメッセージが含まれている。青豆とのつながりの可能性が前景化することで、天吾を縛る母なるものからの束縛は後景化する。「最後にあの幻影を目にしたのはいつのことだったろう？ よく思い出せないが、たぶん新しい小説を書き始めたあたりだ」とある。「新しい小説」は、『空気さなぎ』を「書き直したことによって、自らの内にある物語を自分の作品としてかたちにしたという思いが、天吾の中で強くなった」が故に書かれたものである。その意欲の中には、「青豆を求めめる気持ちも含まれている」と語られている。それと同時に、年上のガールフレンドである安田恭子とのつながりも後景化する。「写真に写っている若い母親の面影が、どことなく年上のガールフレンドに似ていることに思い至った。安田恭子、それが彼女の名前だ」とあるように、天吾は無意識のうちに安田に母親の面影を投影している。安田との関係は、彼女の夫から一方的に「家内は既に失われてしまったし、どのようなかたちにおいても、あなたのところにはもううかがえない」と伝えられ、謎を残したまま終わるが、天吾は彼女の行方を捜すことはない。以下の引用は、青豆とのつながりに焦点が絞られることで、それ以外のつながりが切斷され、物語から退場していくことを表している。

ここにふかえりがいてくれればいいのに、と天吾は思った。どんなつまらないことでもいい。意味をなさないことでもいい。抑揚や疑問形が宿命的に欠落していてもいい。彼女が語る言葉を久しぶりに耳にしたかった。しかしふかえりがもう二度とこの部屋に戻ってこないだろうことは、天吾にはわかっていて。

(略)

誰でもいい、誰かと話をしたかった。できることなら年上のガールフレンドと話をしたかった。しかし彼女に連絡をとることはできない。連絡先はわからないし、それに彼の告げられたところによれば、彼女はもう失われてしまったのだ。

小松の会社の電話番号を回してみた。彼のデスクに繋がる直通の番号だ。しかし電話には誰も出なかった。十五回ベルを鳴らしてから、天吾はあきらめて受話器を置いた。

ほかに誰に電話をかけられるだろう、と天吾は考えてみた。でも一人として適当な相手は思い浮かばなかった。安達クミに電話してみようかとも思ったが、考えてみれば電話番号を知らなかった。

ここを去ることにとくに心残りはない。七年のあいだこの部屋で暮らし、週に三日予備校で教えてきたが、ここが自分の生活の場だという感覚を持ったことは一度もなかった。流れの中に浮かぶ浮島のような、一時しのぎの居場所に過ぎなかった。週に一度ここで密会を続けていた年上のガールフレンドもいなくなった。しばらく住み着いていたふかえりも出ていった。彼女たちが今どこで何をしているのか、天吾にはわからない。しかしとにかく彼女たちは天吾の生活から静かに消えていった。予備校の仕事にしても、彼がいなくなったところで誰かがそのあとを埋めるだろう。天吾なしでもこの世界は支障なく動いていくだろう。青豆と一緒にどこかに移動したいというのであれば、迷いなく行動を共にすることができる。

前者は天吾が父親の葬儀を終え、東京に戻ってきた際の感慨である。彼は失われてしまったことを知りつつも、他者とのつながりを

求めている。後者は青豆の伝言をタマルから受け取った後のものである。ここでは青豆以外とのつながりを求める気持ちは無くなっている。ふかえり、安達、小松は、天吾を青豆へ導くものとして機能する、換言すると彼らとの関係性は青豆との異性愛のための布石である。天吾と母なるものとのつながりもまた、青豆を求める想いにとって代わるのである。

二 象徴的な父殺し

1 青豆とリーダーの関係性

本章では、父親とのつながりに焦点を当てる。『I Q 84』は父親の存在が前景化した点に、過去作品との大きな相違がある。宗教団体の教祖という父なるものの青豆による殺害、天吾の父親との葛藤が描かれている。『海辺のカフカ』にも父親が表れるが、カフカ少年との接触はなく、佐伯との関係性に焦点が絞られることで、父親との問題は後景化していると言えよう。

ユングの高弟・エーリッヒ・ノイマンは『意識の起源史』⁽¹⁸⁾の中で、ウロボロスを父母のどちらも象徴するものだとし、ウロボロスとの戦いを通して人は成長すると論じる。「ウロボロスから分離し、世界の中へ・そして世界を支配している対立原理との対決の中へ入っていくことは、人類の発達にとっても個人の発達にとっても本質的な課題である」⁽¹⁹⁾。「父たちは原始時代のタブーの掟から現代の裁判に到るまでの法と秩序の代理人であり」、「文明と文化の最高の財産を継承する。こうして父親世界は集合的価値の世界であり、また歴史的世界である、つまり集団の意識発達の程度いかに関わっている」⁽²⁰⁾。すなわち、父とは既存の文明、文化、社会を象徴する存在である。

日本近代文学と家父長制の問題は密接に関わっている。瀬沼茂樹は「わが近代文学の当面した現実生活は」、「家」の框にはめられた家庭生活の上に演じられるいろいろな人間悲劇でさえあった⁽²¹⁾と論

じている。島崎藤村の『家』⁽²²⁾は「妻子、奉公人がすべて家長にたいし主従関係を取り、その上に隷属倫理を組み立てられている機構を明らかにした」⁽²³⁾。志賀直哉の『或る朝』⁽²⁴⁾には「廢嫡するとも此事は許さぬ」という最後の切札としての家父長権を楯にと「る父と、「年寄の云ひなり放題になるのが孝行なら、そんな孝行は真つ平だ」と放言するほど、自己の気分、自然な快・不快の条件に誠実⁽²⁵⁾な順吉の対立が表われている。家父長制への批判、それを代表する父と子の対立という図式をそのまま『I Q 84』に見出すことに意義があるのだろうか。清水良典は『I Q 84』には「掟の番人として畏怖されるべき〈父〉が空位の時代」⁽²⁶⁾が表れていると論じる。内田樹はリトル・ピープルとは「小さな父たち」の「しけた悪意」の集合表象⁽²⁷⁾だとし、「困難な歷程の果てに、主人公たちが「邪悪で強大な父」という表象そのものを無効化し、「父」を介在させて自分の「不全」を説明するという身になじんだ習慣から抜け出して終わる」⁽²⁷⁾点を評価している。清水、内田共に強大な父と闘う子という図式をずらし、無効にする点に慧眼がある。作中に表れる父が弱く小さな存在であるならば、青豆、天吾の象徴的な父殺しは旧い制度の乗り越えや相対化にはならない。父殺しを経て生じる変化は、彼らが互いに〈コミットメント〉を求めるようになるという点に限られる。

青豆の象徴的な父は、宗教団体・さきがけのリーダーである。「霊的な覚醒を賦与するという口実」によって、リーダーから性的虐待を受け、心身共に傷ついたつばさと出会った際、青豆は「自分自身のそうであったかもしれない姿」を見出す。つばさと「証人会」の強いる戒律によって孤独であった青豆が二重写しになることで、彼女はリーダーを殺害する個人的な動機を得る。

十歳より前に起こったことを残らず忘れてしまおうと、彼女は長いあいだ努力を続けてきた。私の人生は実際には十歳から

開始したのだ。それより前のことはすべて惨めな夢のようなものに過ぎない。そんな記憶はどこかに捨て去ってしまおう。しかしどれだけ努力しても、ことあるごとに彼女の心はその惨めな夢の世界に引き戻された。自分が手にしているもののほんとは、その暗い土壌に根を下ろし、そこから養分を得ているみたいに思えた。どれほど遠いところに行こうと試みても、結局はここに戻ってこなくてはならないのだ、と青豆は思った。

私はその「リーダー」をあちらの世界に移さなくてはならない、と青豆は心を決めた。私自身のためにも。

リーダーはあくまでつばさにとつての父なるものである。しかし、青豆がつばさにあり得たかもしれない自己を重ね合わせることで、リーダーは青豆にとつても父なるものとして機能する。

さきがけを調査した中野あゆみは以下のように語る。「『さきがけ』はこと経済活動に関しては、見かけほどクリーンではない。『こいつらは山梨県内だけじゃなくて、東京や大阪の中心部にも土地や建物を確保している。どれも一等地だよ。』「そんなまとまった額のお金は、いったいどこから出てくるんだらうね?」『リーダー』と呼ばれる指導者にはかなりのカリスマ性が具わっているらしい。人々はこの男に深く私淑している。言うなれば、この男の存在そのものが教義の核みたいなかたちで機能している。成り立ちとしては原始宗教に近いんだよ。』「システムの中心にいるのは、どうやらこの正体不明のリーダーらしいんだ。この調査から、さきがけは裏で巨額の資金を扱う組織であり、その頂点に立つリーダーは信者を牛耳り、私欲のために少女を襲う、撃つべき悪しき父として浮かび上がる。」

しかし、実際にはリーダーは「声を聴くもの」としてリトル・ピープルに使役される存在である。少女たちとの性交渉は彼が望んでも

のですらない。リーダーの身体はしばしば麻痺状態に陥る。信者たちは「そのような状態は天からもたらされた恩寵であり、一種の神聖な状況なのだと考え」、巫女の役割を担う少女たちに性交渉をさせているのである。リーダーはシステムの頂点に立つ存在ではなく、システムに絡めとられた存在であると言えよう。リーダーは自身が殺害されることでもたらされる影響を以下のように語る。「リトル・ピープルに一矢報いることはできる。言うなれば復讐することができる。彼らはまだわたしの死を望んでいない。わたしがここで死ぬば空白が生じる。少なくとも後継者ができるまでの一時的な空白がね。彼らにとつては痛手になる」。この発言を言い換えると、彼の死はさきがけにとつて「一時的な空白」、「痛手」にしかならず、その空白が埋まればシステムは元に戻るといふことである。すなわち、青豆がリーダーを殺しても、それは既存の制度の相対化にはならない。

先に論じたように、青豆がリーダーを殺害する動機は、既存のシステムの転覆や乗り越えを狙ったものではない。青豆は証人会とさきがけ、彼女自身とつばさを重ね合わせることで、孤独をもたらしものとの訣別という動機を有していた。その動機さえも、リーダーとの会話によって後景化し、リトル・ピープルに狙われた天吾を救うというものに変化している。

「あなたが望むとおおり、あなたをこの世界から消滅させます。苦痛のない一瞬の死を与えます。天吾くんを生き延びさせるために」

「わたしと取り引きをするということだね」

「そうです。私たちは取り引きをします」(略)

「私があるあなたを殺せば、本当に天吾くんは生き残れるのね?」

(略)

「天吾くんは生き残る。わたしの言葉をそのまま信じていい。そ

これはわたしの命と引き替えに間違いなく与えられることのできるものだ」

この青豆とリーダーのやり取りから、青豆は天吾を守るための「取り引き」として殺害を実行したと言える。また、リーダーが青豆に「取り引き」を持ち掛けるにあたって、天吾が「今にいたるまで君以外の女性を誰一人、心から愛したことはない」と告げる。この事実が青豆が知り得ないことである。この場面がない限り彼女が天吾との再会を実現させようと試みることで済まない。すなわち、青豆の象徴的な父殺しは、天吾との〈コミットメント〉の布石として機能するものである。

2 天吾と父親の関係性

次に天吾の象徴的な父殺しを分析する。彼の象徴的な父とは、育ての父親である。天吾は父親の在り方を否定することで象徴的な父殺しを行うが、それは既存の制度の乗り越えを意味するものではない。天吾の父親は「NHKの集金人」として生計を立て、「巨大な組織に自分が属していることに彼は大きな満足を感じ」ていた。しかし、父親は組織を象徴するような存在ではなく、定年退職を迎え、療養所に入所している「現在」では、組織とのつながりは途絶えている。天吾の父殺しは自身の臆病さの克服という意味にとどまる。二度目の面会の際、天吾は父親に「それまでに送ってきた人生のあらましを語り、以下のように独白する。「母親が本当に亡くなったのかどうか、調べようと思えば簡単に調べられた」。「でも僕にはどうしても書類を請求することができなかった。事実を目の前に差し出されることが怖かったんだ。自分の手でそれを暴いてしまうことが怖かった」。彼はここで臆病な自身を発見する。かつて天吾は「母親についての知らせは、それがもし与えられるものであるのなら、部分的な情報としてではなく、総合的な「啓示」として与えられなくてはならぬ」と考えていた。二度目の面会時では、かつての考え方を翻し、単に自身が臆病であり、真実を知ることを避けていたと告白している。

天吾は最後の面会で、昏睡状態の父親が「現実の肉体を放棄し」「自分の内側にある世界で」NHKの集金人として活動していると仮説を立て、以下のように父親を否定する。

「あなたには意識を好きどころにやる権利がある。それはあなたの人生だし、あなたの意識だ。あなたには自分が正しいと考えることがあり、それを実行に移しているんだろう。いちいちそれに口を出す権利は僕にはないかもしれない。でもあなたはもうNHKの集金人じゃないんだ。だからこれ以上NHKの集金人のふりをしちやいけない。そんなことをしても救いはない」
(略)

「気に入らないかもしれないけど、もう一度ここに戻ってきた方がいい。ここがあなたの属すべき場所なんだから」

天吾は、父親が集金人を騙り、人々を怯えさせる事実、不当な行為を行う姿を父親自身に突きつけ、その振る舞いを現実逃避として切り捨てる。真実を知ることには怯えていたかつての天吾の姿はない。彼は真実から目を逸らす臆病な自己と訣別したのである。これが天吾の象徴的な父殺しだと考える。「老衰という定義がもっとも近いが、父親はまだ六十代半ばだったし、老衰を病名にするには若すぎ」にもかかわらず亡くなることは、天吾の父殺しによってもたらされた必然性のある展開と言えよう。

ここで重要なことは、面会理由が、青豆を見つけ出すこと、彼女とのつながりにとって代わる点である。二度目の面会で、空気さな

きの中で眠る少女・青豆を発見したことを機に、面会の動機が変化
する。

「あなたの見舞いや看病をすることだけが目的じゃなかった。自分
分がどんなところから生まれてきたのか、どんなところに自分
の血が繋がっているのか、それを知っておきたいと思ったとい
うこともある。でも今となつてはそんなことはもうどうでもい
い。たとえばどこに繋がっていいようが、どこに繋がっていいまいが、
僕は僕だ。そしてあなたは僕の父親なるものだ。それでいいじゃ
ないかと思つた。」

「夏にはまだあなたには意識があつた。かなり混濁してはいたけ
れど、意識はまだ意識として機能していた。そのときにこの部
屋で僕は一人の女の子と再会した。あなたが検査室に運ばれて
いったあと、彼女はここにやつてきた。それはたぶん彼女の分
身のようなものだったのだろう。僕が今回この町にやつて来て
長く滞在したのは、もう一度彼女に出会えるかもしれないと思つ
たからだ。それが僕がここにいる本当の理由だ」

父親とのつながりが「どうでもいいこと」になり、青豆との再会
が「本当の理由」になる。この点から、天吾の父殺しが青豆とのつ
ながりのための布石として機能していると言える。象徴的な父殺し
は旧い制度の乗り越えにはならず、個人的な文脈の中でのみ機能を
果たすものになっている。

三 〈「ミットメント」の到達点と「継承」へのまなざし〉

天吾と青豆のつながりに、他の登場人物たちとのつながりがとつ
て代わる、または布石として機能していると論じた。すなわち〈コ

ミットメント〉とは、共時的な一対一の異性愛を対象とし、他の関
係性を度外視していると考えられる。特に象徴的な父殺しがそれと
して機能し得ないのであれば、『IQ84』における社会との関わり
は希薄である。しかし、地下鉄サリン事件が一つの契機となり、〈コ
ミットメント〉へ転換したことを踏まえれば、社会と個人の関係を
描くことは、村上春樹のかねてからの目標と言えよう。

元々、〈コミットメント〉は〈デタッチメント〉を反省した結果生
まれた概念であつた。換言すると、〈デタッチメント〉の陥穽を補う
ものとして〈コミットメント〉が表れたということである。そうで
あるならば、〈コミットメント〉は〈デタッチメント〉との比較に
よつて評価される、あくまで相対的なものである。決して万能なも
の、絶対的なものとして想定されていたのではないだろう。村上春
樹は〈デタッチメント〉について以下のように語っている。

自由になりたい、個人になりたいという思いが僕には強くあ
り、物語のなかでも主人公が個人であること、自由であること、
束縛されていないことがなにより重要だつた。そのかわり社会
的保障はない。大きな会社に勤めていたり、家庭を持つていた
りするというのは、一種のセキユリテイが働いているというこ
とです。そのころ僕が描いていた主人公たちには、そんな装置
がほとんど働いていません。それが大事なポイントだつた。(略)
日本人は自由なんてとくに求めていないと悟つたんです。そ
ういう国のなかで自由でありたい、個でありたいと思うことの
きつさを、僕は自分なりに、小説的に描きたかつたんだと思う。
それが僕にとっての三十代のひとつのテーマでした。⁽²⁸⁾

〈デタッチメント〉とは、自由であること、個であることを求めて
いく態度の表明であつたが、負の要素が問題視され、作中に表れる

ようになった。(デタッチメント)を体現する主人公たちは、しばしば他者を傷つけ、深い孤独に陥る。「羊をめぐる冒険」⁽²⁹⁾では、自ら離婚を切り出しながらも「本当のことを言えば、あなたと別れたくないわ」⁽³⁰⁾と言う妻に対し、僕は「彼女にとって、僕は既に失われた人間だった。たとえ彼女が僕をまだいくら可愛していたとしても、それはまた別の問題だった。我々はお互いの役割にあまりにも慣れすぎていたのだ。僕が彼女に与えることができるものはもう何もなかった」⁽³¹⁾と一方的に決めつける。「ノルウェイの森」⁽³²⁾の主人公・ワタナベは、縁から「あなたはいつとも自分の世界に閉じこもっていて、私がいちばん、ワタナベ君、こんこんとノックしてもちよつと目を上げるだけで、またすぐもとに戻ってしまうみたいです」⁽³³⁾と指摘される。つまり、(デタッチメント)の時期の作品の主人公たちは、恋人や妻にあたる異性との一対一の共時的な関係すら築くことができなかつたのである。この陥穽を補う(コミットメント)が、異性間の一対一の共時的な関係性の構築を目指していたことは想像にかたくない。(デタッチメント)の負の要素を補い、青豆と天吾の(コミットメント)を描き切ったところに『IQ84』の到達点があるが、同時に社会とつながりの可能性も表れている。それは、父の個人史の(継承)によって可能になる。天吾の父親は「満蒙開拓団に入り、満州に渡り、過酷な生活を送った。個々が送った日々が歴史を形成すること、社会や制度が歴史の上に成り立つことを考えれば、父たちの個人史の(継承)こそが、社会とつながる一歩であろう。天吾の父親が天吾に(謎解き)を求める点に、その可能性を見出すことができる。父親は、天吾に自身の二面性を喚起させる遺品を遺すことで、父の個人史の(継承)を求めている。

父親の遺品の一つに家族写真がある。それまで、「生活が苦しくカメラを持つ余裕なかなかつたし、わざわざ家族の写真を撮るような機会もなかつた」と父親は説明した。そういうものだろうと天吾も思っていた。その写真を手にしたことで、天吾は以下のように考える。「生きているあいだ彼は、母親についての情報を何ひとつ天吾に与えなかつた。」「しかし最後の最後にひとことの説明もなく、この一枚のぼやけた古い写真を天吾の手に遺していった。何のために？息子に救済を与えるためなのか、あるいはより深く混乱させるためなのか。天吾は写真を遺されたことで、決して相容れることのない父親の二面性を感じている。一方は天吾に救済を与える父親像であり、他方は天吾を混乱させる父親像である。また、生前、父親は遺産相続に関する手続きを行った際、弁護士に「自分が死んだら、そのときはこの封筒を法定相続人に渡してもらいたい」と伝えていた。「法定相続人」とは、天吾だけが該当するため、「息子」や「天吾」と呼ぶことも可能であった。しかし、弁護士は、「川奈さんは常に法定相続人という言葉を使っておられました。それ以外の表現は一度も口になさらなかった」と言う。ここから、天吾を息子と認めない父の姿が浮かび上がる。その一方で、「新聞の古い切り抜きや賞状の類」といった「天吾の「神童」時代の輝かしい遺物を」、父親は「後生大事に持ち歩いていた」とも語られている。ここから、天吾を愛し、大切にする父親の姿が浮かび上がる。この二面性もまた決して相容れるものではない。つまり、父親が天吾に遺したものは、自身の二面性という謎である。天吾にはこの二面性の一方を本当の父親の姿として受け入れ、他方を偽りの姿だと切り捨てることはできないだろう。彼はこの二者択一に引き裂かれ、いつまでも父親にまつわる謎を抱えなくてはならない。実際、遺品を全て確認した天吾は、父親から「あとは自分で好きに推理しろ」と告げられているのだと思ひ、自身が謎を受け取ったことを理解している。彼が受け取った謎を解くことは、父親の真の姿、父親の個人史の理解を意味する。幼少期、天吾は父親から前半生を伝え聞いていた。そこには「愉快な話があり、しんみりした話があり、乱暴な話があった。啞然とす

るような途方もない話があり、何度聞いてもよく呑み込めない話があった」。しかし「NHKの正規職員に採用されたあとのことになると、父親の話はなぜか急に色彩とリアリティーを失って」しまう。天吾はそれを「語るに足りない後日談であるかのような話だ」と語っている。父親の謎、真の姿を理解した時に、「後日談」のような後半生が、歴史を形成する個人の記憶として浮かび上がり、天吾はこれを（継承）したと言えるだろう。

しかし、〈コミットメント〉が前景化することで、一対一の異性愛以外の関係性は後景化する。青豆と天吾は〈コミットメント〉を果たすために、この世界から逃げることを選択する。さきがけのリーダーは、青豆に「もつとも歓迎すべき解決方法は、君たちがどこかで出会い、手に手をとってこの世界を出ていくことだ」と語っていることから、二人が結びつき、逃げるのが望ましい選択肢であることがわかる。しかし、それは1Q84の世界で築いたつながりを擲つことを意味する。それは二人の以下のやり取りに表れている。

「空気さなぎを通じて、それとも私自身が空気さなぎとしての役割を果たして、私はドウタを生もうとしている。そして彼らは私たち三人をそっくり手に入れようとしている。新たな（声を聴く）システムとして」

「そこで僕はどんな役割を果たすことになるのだろう？ もし僕にドウタの父親という以上の役割が与えられているとすればだけど」

「あなたは―」と青豆は言いかけて口を閉ざす。それに続く言葉はない。

青豆は天吾の問いに答えることはできない。その答えとは、天吾がさきがけの次世代のリーダーとして、先代の役割を引き継ぐこと

を意味するものであろう。彼女は自身がマザとなりドウタを生もうとしていること、すなわち、1Q84の世界で自身に与えられた役割を理解している。我が子の父が天吾だと確信している彼女は、彼がさきがけのリーダーの跡を継ぐレシヴァとしての役割が与えられていることも理解しているだろう。「あなたは―」と言いかけて沈黙する青豆の様子から、天吾がシステムを継ぐ存在になることへの戸惑いが読み取れる。元々、二人の再会は、青豆がタマルを使役して用意させたものである。あくまで天吾は提案を受け入れたに過ぎない。彼女が用意した再会抜きに、〈コミットメント〉は成り立たない。青豆の用意を基にした〈コミットメント〉に、彼女の意思が反映されていることは当然であろう。すなわち、青豆の逃げるという選択は、一対一の異性愛のつながり以外の関係性への〈デタッチメント〉を意味する。

逃げるという選択は、前作『アフターダーク』⁽³⁴⁾によって既に禁じられている。娼婦・郭冬莉に暴力を振るい、逃げる白川に対して、売春を斡旋する中国の組織は、「逃げ切れない。どこまで逃げていね、わたしたちはあんたをつかまえる」⁽³⁵⁾と宣言している。この発言に着目した先行研究に今井清人の論がある。

受け手を不特定の匿名的個人とすれば発信元も変化する。「わたしたちって、いったい誰のことなんだ？」と高橋は自問するが、その問いかけは読者に対するものにもなる。「あなたは忘れるかもしれない、わたしたちは忘れない」を登場人物の個人間のやりとりという枠、小説内の〈今ここ〉という枠から外すと「わたしたち」はどのような声になるのか考えることを読者は要請される。すると発信元も不特定の匿名的存在としなければチャネルは成立しないことに思い至るはずだ。すなわち「わたしたち」と名乗る発信者は中国の人々になるのだ。「歴史」が浮上

するのだ。村上春樹の父の世代が中国の地でつづけた戦争。暴力を振るった側は忘れようとしているかもしれないが、やられた側は忘れないということなのだ。世代が違う、自分が生きた時間のできごとではない、と簡単に切り捨てることはできない。父の世代を引き継ぎ、次の世代に伝えなければならぬという作者村上春樹のメッセージを読み取ることができる。³⁶⁾

この論説は、そのまま青豆と天吾の在り方への批判として読むことができよう。二人が結びつくためには、逃げなくてはならず、それは〈コミットメント〉というテーマの名の下に命じられている。しかし、それは既に禁止されていることでもあり、二人は自身の暴力性や、負の遺産から目を逸らすように禁止を破るのである。

〈コミットメント〉が前景化し、青豆と天吾の一对一の共時的な異性愛に焦点化されるが、それは〈継承〉の可能性が潰えたことを意味しない。天吾は青豆との逃避行に「父親の遺していった貯金通帳と実印、戸籍謄本、そして謎の家族写真」を持って行く。青豆は天吾との間に子どもをもうけること、すなわち自身が個人史を〈継承〉させる立場になることを拒否する様子はない。天吾がふかえりに話した「歴史とは集合的な記憶のことなんだ。それを奪われると、あるいは書き換えられると、僕は正當な人格を維持していくことができなくなる」という言葉や、老婦人が青豆に話した「人間というものには結局のところ、遺伝子にとってのただの乗り物であり、通りに過ぎないのです」という言葉は正當性のあるものとして受け入れられている。〈コミットメント〉の到達点と〈継承〉の可能性が表れた点に『1Q84』の意義があると考える。

結 論

『1Q84』における〈コミットメント〉は、青豆と天吾の一对一

の共時的な異性愛を意味している。二人が結びつくにあたって、他の関係性は希薄となり、登場人物たちはその役割を終え、物語から退場する。象徴的な母子、父子間の癒着、葛藤が表れるが、それもまた青豆、天吾の異性愛にとって代わる。特に父なるものは、既存の制度を象徴する存在ではなく、弱い父として描かれている。それ故に、象徴的な父殺しを行うことは、制度の相対化にはならない。青豆と天吾が〈コミットメント〉するために、逃げるという選択をとるが、それは関わりを求められる制度からの逃亡である。

一对一の異性愛ですら不可能であった〈デタッチメント〉との比較から考えると、〈コミットメント〉が青豆と天吾の結びつきを対象とすることに正当性がある。〈コミットメント〉に転換しながらも、そこに社会参画が表れていないという批判は、〈コミットメント〉というキーワード、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件を機に転換した村上文学の軌跡への絶対視、神聖視から生じたものであったと思われる。

親世代、またはそれ以前からある制度や社会を対象とする通時的な関わりは、〈継承〉という個人史の引き継ぎに表れている。『1Q84』は、〈コミットメント〉の到達点と〈継承〉へのまなざしのことからも表れた作品である。〈コミットメント〉から〈継承〉へという村上文学の再転換が表れている点に、本作品の意義がある。

* やまもと ともみ

文学研究科国文学専攻博士課程後期課程
二〇二二年九月二二日 査読審査終了

注

(1) 酒井英行は青豆による女性らしさの規範への反抗を評価したが、最終的に彼女が異性愛的規範に回収されてしまったと論じている。「愛する心が不在の、自らが欲望のために主体者になって能動的に関わる行きずりの男性とのセックスとは違うのだ。「〜されたい」、「〜してほし

い。受け身に愛されることを希求する（女性的）セクシュアリティ。この規範に青豆はすつぱりと収まってしまふ。「クールでタフな」青豆はどこへいったのか?」（『青豆のセクシュアリティ』、『IQ84 スタディーズ BOOK1』若草書房、二〇〇九年一月、一九二頁）。遠藤郁子は、女性である青豆に王位継承権がないことに着目し、その不平等性を批判しつつ、それ故に女性には王位を空位にできる可能性が秘められていることを論じる。「もし男性が王殺しを行うなら、その殺人者が次の王としてそのシステムの再生産を可能にする。しかし、女性である青豆が王を殺すのであれば、自らを新たな王とすることなく、王のポストを空位にできる。青豆は、その男権的な支配システムの中にあつて隠蔽されてきた女性という存在であるがゆえに、その支配システムの再生産に加担することなく、その輪を断ち切ることを可能にするのだ。」（『戦う女性表象で読む「IQ84」』、米村みゆき編『村上春樹 表象の圏域』、『IQ84』とその周辺』、森話社、二〇一四年六月、一九四—一九五頁）。

(2) 森達也は善悪、正邪の二元論を批判し、さきがけを撃つ青豆たちこそがカルト集団的な要素があると論じる。「あの老婦人と青豆たちだつてカルトですよ。自分たちの正義を信じ切っていて、邪悪な人たちは別の世界に行つてもらわなくてはいけないと言っている。要するにポアです。オウム的なものは、カルト集団のほうには現れていない。」（『相对化される善悪 オウム真理教事件から14年経て辿り着いた場所』、『村上春樹「IQ84」をどう読むか』、河出書房新社、二〇〇九年七月、三一頁）。鈴木和成は、『IQ84』を、オウム真理教のドグマを複数性の世界に解き放つ作用があると評価している。「最新長篇で村上はノンフィクションのインタビュー集を一大長篇小説に転換した。換言すれば、一つしかない真実を複数の虚構に脱構築したといつてよく、結果は一枚岩の「オウムのなるもの」を複数性の世界に解き放ち、結論—終わり—を「差延」する、小説本来のめざましい効果をいかんなく発揮することになった。」（『似ることは、覆すこと 村上春樹と「IQ84」の透明世界』、『村上春樹「IQ84」をどう読むか』、河出書房新社、二〇〇九年七月、九九—一〇〇頁）。

(3) 沼野充義はジョージ・オーウェルの『1984年』のビッグ・ブラ

ザーと『IQ84』のリトル・ピープルを比較することで、現代のシステムを操る存在の差異を論じる。「執筆時点から見て未来の年代に作品を設定しているのに対して、村上春樹は現在から過去に遡っているという、時間的指向性がまず逆向きだし、オーウェルが幻視していた恐るべき独裁者に支配される全体主義の問題は、村上春樹においては社会制度批判としては現れず、『IQ84』では人間の自由を奪う「全体主義的権力」はもはやスターリンやヒットラーではなく、妻に暴力をふるう夫や少女を凌辱するカルト教団の教祖になっている。」（『オーウェル、チェーホフ、ヤナーチェック「IQ84」をより深く楽しむための注釈集』、『村上春樹「IQ84」をどう読むか』、河出書房新社、二〇〇九年七月、四二頁）。清水良典は小市民の欲望と悪意の肥大化、それによって社会が支配されたIQ84の世界を描くことで、村上春樹は読者に警告をしていると論じる。「明らかにそこは現在の日本、そして世界の不幸な行き詰まりや崩壊作用が始動したターニング・ポイントのような時代なのである。そんな一九八四年の日本を支配して「IQ84年」に変えてしまふのが、「不特定多数」の小市民の潜在的欲望と結託したリトル・ピープルである。そこには強権によって維持される独裁社会の明示的な悪とは別種の、小市民の心の底の欲望が肥大化した末に、深層的な悪が潜んでいる。リトル・ピープルに支配された「IQ84」を通じて、われわれの通ってきた道を遡って検証しなおすこと、そうならなかった歴史、こうなったかもしれない歴史を創造することが「IQ84」のモチベーションではないか。」（『リトル・ピープル』とは何ものか』、『村上春樹「IQ84」をどう読むか』、河出書房新社、二〇〇九年七月、一九一頁）。

(4) 石原千秋「いまのところ「取扱注意」である」（『村上春樹「IQ84」をどう読むか』、河出書房新社、二〇〇九年七月）、五九頁。

(5) 池田純一「未来小説としての総合小説」（『総特集村上春樹—「IQ84」へ至るまで、そしてこれから…』第四二巻第一号『ユリイカ』1月臨時増刊号）、四七—四八頁。

(6) 池田 前掲書（注5）、五〇—五一頁。

(7) 村上春樹『村上春樹 雑文集』（新潮社、二〇一一年一月）、七五—八〇頁。

- (8) 島田裕巳「これは「卵」側の小説なのか」(『村上春樹』1Q84)をどう読むか、河出書房新社、二〇〇九年七月、二二―二三頁。
- (9) 竹内真「村上春樹をめぐる、くたびれた冒険」(『村上春樹』1Q84)をどう読むか、河出書房新社、二〇〇九年七月、二〇九―二一〇頁。
- (10) 宇佐美毅「村上春樹は嘘をつく／嘘をつかない」(宇佐美毅・千田洋幸『村上春樹と一九九〇年代』、おうふう、二〇一二年五月)、二八四頁。
- (11) 坂上秋成「浄化の物語」を願いながら 三人称・コミットメント・反サプリメント」(『総特集村上春樹』1Q84)へ至るまで、そしてこれから…」第四二巻第一五号『ユリイカ』1月臨時増刊号)、一四五頁。
- (12) 山本智美「村上春樹論―(継承)について」(『中央大学大学院論究』Vol. 54 文学研究科篇 二〇一二年三月)。
- (13) 村上春樹『海辺のカフカ』(新潮社 二〇〇二年九月)。
- (14) 河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』(岩波書店、一九九六年一二月)。
- (15) 河合・村上 前掲書(注14)、七〇―七一頁。
- (16) 河合・村上 前掲書(注14)、八五―八六頁。
- (17) 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル 第一部 泥棒かささぎ編』、『ねじまき鳥クロニクル 第二部 予言する鳥編』(講談社、一九九四年四月)、『ねじまき鳥クロニクル 第三部 鳥刺し男編』(講談社、一九九五年八月)。
- (18) エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史』(紀伊國屋書店、一九八四年五月)。
- (19) E・ノイマン 前掲書(注18)、七六頁。
- (20) E・ノイマン 前掲書(注18)、二八四頁。
- (21) 瀬沼茂樹『近代日本文学のなりたち』(河出書房、一九五一年一月)。
- (22) 島崎藤村『家』(『読売新聞』一九一〇年一月から四月、〔中央公論〕一月、四月)。
- (23) 瀬沼茂樹『近代日本文学のなりたち』(角川書店、一九六一年八月)、二二〇頁。
- (24) 志賀直哉『或る朝』(春陽堂、『新興文藝叢書、第七編』、一九一八年三月)。
- (25) 瀬沼 前掲書(注23)、二二七頁。
- (26) 清水良典「〈父〉の空位」(『文学界』二〇〇九年八月)、二二三頁。
- (27) 内田樹「父」からの離脱の方位」(『村上春樹』1Q84)をどう読むか、河出書房新社、二〇〇九年七月)、三八頁。
- (28) 村上春樹「特集 村上春樹ロングインタビュー」(『考える人』季刊誌二〇一〇年夏号、二〇一〇年八月)、六七―六八頁。
- (29) 村上春樹『羊をめぐる冒険』(講談社、一九八二年一〇月)。
- (30) 村上春樹『村上春樹全作品 一九七九―一九八九② 羊をめぐる冒険』(講談社、一九九〇年七月)、三八頁。
- (31) 村上 前掲書(注27)、三八頁。
- (32) 村上春樹『ノルウェイの森』(講談社、一九八七年九月)。
- (33) 村上春樹『村上春樹全作品 一九七九―一九八九⑥ ノルウェイの森』(講談社、一九九一年三月)、三六―二頁。
- (34) 村上春樹『アフターダーク』(講談社、二〇〇四年九月)。
- (35) 村上 前掲書(注30)、二五六頁。
- (36) 今井清人「村上春樹の音楽Ⅷ―『アフターダーク』を中心に」(『専修総合科学研究』二七号、二〇一九年一〇月)、一三三頁。